

花畔・銭函間運河

明治28（1895）年に着工され、明治30年に完成した花畔（現在の石狩市民図書館付近）と小樽市銭函を結ぶ排水、運送用運河。樽川運河とも呼ばれるほか、札幌市域では山口運河として知られています。

延長14,500m、底幅3.6mで、設計は、札幌農学校出身の「石狩川治水の祖」として知られる岡崎文吉博士です。当時、花畔村と樽川村は、水はけが悪く、開拓民にとって排水路建設が切実な問題でした。開通後は、排水路としては大きな役割を果たしましたが、砂地を開削したため、崩れやすく、水路の維持は困難でした。また、新川・花畔間は水位が足りず、舟の通行は難しかったようです。



当時の北海道庁長官、北垣国道は、札幌と小樽（銭函）を運河で結ぶ計画を立て、その一環として花畔・銭函間運河を建設しました。北垣長官は、前任の京都府知事時代に琵琶湖疎水という運河を開削して成功を納めており、北海道にもこの手法を当てはめようとしたものと考えられます。石狩市内の運河跡は、市民図書館の裏をはじめ大部分が残されており、現在も見ることができます。

（工藤義衛）

- (1) 札幌市（1984）新札幌市史／通史編 2.
- (2) 長谷川嗣（1969）親船町他九町三村時代の石狩.
- (3) 河野常吉（1987）北海道植民地状況報文石狩国.
- (4) 北海道の治水技術研究所（1991）石狩川治水の曙.
- (5) 石狩川振興財団（2004）石狩川舟運史.
- (6) 松浦茂樹（1994）総合開発としての琵琶湖疎水事業／川を制した近代技術.